水泳部のお姉さん
と
臨時のお手伝いの女装君

水泳部のお姉さんと臨時のお手伝いの女装君（体験版）

目次

０話……3
１話……10
２話……20

0話

「♪～♪～」

風呂場の中で1人の少女が鼻歌を響かせながら少年の髪の毛を洗っていた。

髪を洗って貰ってる空は、眼を瞑り洗い終わるのをじっと待っている。

「んー、こんなものかなぁ……。じゃあ流すね」

そう言って髪を洗っていた美波は空の頭の上からシャワーで丁寧に洗い流す。

「よし。じゃあ身体拭き終わったら呼んでね」

空がタオルで身体を拭き終わって美波を呼ぶと籠の中から用意していた着替えを取り出した。

「それじゃ、まずコレね。新品だから安心して」

「し、下着も！？」

「もしスカートが捲れて男物が見えたら変でしょ？」

そう言われて諦めた空は、渡たされた真っ白なショーツを手に取る。

美波に背を向け、深呼吸してから腰のタオルを外してショーツに足を入れる。

そこから思い切って引き上げ履くと、柔らかい布が下半身を包み込む感覚に鼓動が高まる。
「うん。ピッタリとは言えないけど大丈夫だね。次はブラだけど……着けてあげるね」
「ブラジャーは必要ないと思うんですが……」
「ブラも着けてないとわかっちゃうし、ちょっと膨らみ作っておけば万が一にも安心でしょ」
有無を言わさず美波は空に着けたブラジャーを調整して薄いパットで小さな膨らみを作る。
「こうすればまず男の子だとは思わないでしょ。はいじゃあ次スカート穿かせてあげるから足上げて」
「うぅ……変な感じ……」
空の細いウエストにスカートが合わされホックを止めてファスナーが上げられる。
スカートに戸惑ってる空を無視して今度は上着のセーラー服を着せ細部を整えていく。
「じゃあそこに座って、ちょっとじっとしててね」
美波は空を鏡台に座らせ眉毛を整え髪の毛を丁寧にとかしていく。
「ふふん、でーきた。空君て女の子っぽいし少し弄ったら可愛くなるって前から思ってたんだよね」
鏡には空の面影が微かに残った女の子が出来上がっていた。
シャンプーと制服から香る甘い匂いに空は少し頭がくらくらしそうになる。

下着は新品を用意したが、流石に制服の方は姉のお下がりを使用する他になかった。

「ねえ、可愛くなったでしょ。由奈も見てよ」

「あー、うんなんか違和感なさすぎてちょっと……」

空の姉の由奈は自分の弟が可愛い妹になってしまったのに半分呆れた様子だった。

「はぁ……、不安になってきた。やっぱり私が行った方が……」

「ダメだよ怪我人は家でおとなしくしてなきゃ」

「そうは言っても……」

心配してる由奈は包帯が巻かれた自分の足を見てため息をついた。

少し前、水泳部のマネージャーだった美波は夏休みの時だけ空の姉の由奈に手伝ってもらう約束をしてい

た。
しかしその後、大雨とはいかないものの結構な雨の日に、傘を持ってなかった空を由奈が駅まで迎えにいった時の事。
階段が雨で滑りやすくなっていたのか空が由奈を巻き込む形で転んで怪我をさせてしまった。
責任を感じた空は自分に出来ることはないかと由奈に相談したが女子校だからと言われ諦めていたが、少しした後、空に女の子になれば大丈夫かもと提案したところ、少しためらった後、空は了承したのだった。
幸い、空の両親は共働きで部活のある平日は夜まで仕事なので着替える場所の心配はなかった。
仮に無理な場合は美波の家や近くの公園のトイレを利用する予定だった。
「それじゃあそろそろ行こっか。空くん」
不安そうな表情をしている由奈を置いて美波は空を連れて家を後にする。
外へと足を踏み出した空は、揺れるスカートの感触に落ち着かない様子で歩き出した。
「ほら前向いて。大丈夫だよ女の子にしか見えないから」
「は、はい。あの気になっていたんですけど顧問の先生とかは平気なんですか？」
「それがね、なんかの病気で入院しなきゃいけないとか、夏休みしか時間が無いとかで。だから最初由奈に頼んでた

んだけどね」
「うぅ。ごめんなさい」
「あぁ、気にしないで。代わりに来てくれるなら空くんでも大丈夫だから。
それに夏休みは指導員としてＯＧの先輩が来てくれるから専門的なことは問題ないし」
「へぇ……。でも他に手伝ってくれる人がいるならお姉ちゃんに頼まなくても大丈夫だったんじゃ？」
「え！？　えっと……、ほら。暑いし熱中症が怖いから負担を減らす為に人手は多い方がじゃない？」
「あ、確かにそうですね」
空はなぜかほっとしている美波を疑問に思いながらも注意事項や活動内容などを確認しながら学校へと向かっていった。
……
「ということで、怪我した由奈の弟の空くんです」
何事もなく学校に着いた二人はプールサイドで十数名の部員達の前で空を紹介し始めた。
「あの、頑張ります。よろしくお願いします」

水着姿の女の子達に少々目のやり場に困りながら空が照れながら挨拶をする。
「写真で見たときより可愛いじゃん。本当に男の子？」
「ねえねえ、彼女とかいるの？」
「制服似合ってるね。もしかして普段から女の子の格好してたりする？」
などと挨拶をした空の前に数名の部員が群がり質問攻めに困っていた。
「はいはい、質問ならあとで。それと手伝いに来てくれたんだから困らせちゃ可愛そうでしょ」
その声と供に数名の部員達は空に手を振りながらそそくさと解散し準備を始め出した。
「いきなりごめんね。私はここの部長の彩音。よろしくね」
「は、はい。よろしくお願いします。えっと部長さん」
「彩音でいいよ。空くんのことは美波に任せる感じになるけど、何かあったら私にも相談して大丈夫だからね」
優しく微笑んだ彩音の言葉に不安だった空は少し安心した様子でホッっとしていた。
「それじゃあ私たちもそろそろ準備しよっか。
行く途中に話したと思うけど基本的に雑用ばっかになるけどお願いね」
「はい。あの、そろそろジャージに着替えていいですか？」

「えー着替えちゃうの？」
「制服似合ってるからそのままでいいじゃん」
「いや、でも濡れちゃうし、それにスカートだと落ち着かなくて……」
「じゃあ今日だけでいいから。お願い」
「え、でも……」
数名の部員の要望に困ってる空は助けを求めるように美波の方を見る。
「まあ、いいんじゃない。少しくらいは」
「うぅ、美波さんまで……」
結局断り切れず制服のままでいることになってしまう。
少ししてそのことに気づいた彩音はものすごく申し訳なさそうに空に謝っていた。
そして練習が始まり空は由奈の指示に従って動いていった。

1話

それからしばらくして午前の練習を終え、お昼の休憩時間になった。

「へえ、空くん彼女いないんだぁ。モテそうなのに」

「モテるだなんて。背も高くないし、運動もそんなに得意じゃないですし」

「でも空くんは優しいし気も効くし、私はそういう人の方が好きだな」

「あ、あの彩音さん！？」

空に対して距離を詰めながら好意とも取れるような彩音の発言に胸が高鳴る。

そう言った意味では無いと頭の隅で理解していながらも、女性に冗談でも好きなんて言われたことの無い空は動揺を隠せない。

「え、いや……あのっ。あ、僕ちょっとトイレにいってきます」

困った空はこの場の雰囲気から逃げるように離ようとする。

「ふふ、照れちゃって可愛い」

一時的な非難のつもりでもあったがトイレにも行きたかった空はトイレに向かう。

当たり前だが女子トイレしかないので仕方ないが、変な誤解をされたくないので慎重になる。
誰もいないのを確認すると急いで個室に入り鍵をかける。
「う、これ結構恥ずかしい……」
スカートが汚れないように抱えて座り、用を足す空は落ちつかない様子だったがなんとかそれを終える。
トイレから出るときも慎重に確認して脱出を図る。
「トイレ行く度にこれじゃ……」
と溜息を吐きながらプールサイドに戻ろうと歩いていると自分より一回り大きい人と目が合う。
午前中には見てない顔だった為空は少し対応に困ったが、相手は理解してたようで笑顔で空に近づく。
「あぁ、君が手伝いに来てくれた空くんだね。私は水泳部の楓、よろしくね」
今日はちょっと用事があって午後からの参加だったの」
とりあえず自分の状況を知っている人のようで安心し、再びプールサイドの方に身体を向けた時、楓に呼び止められる。
「ちょっといい？　シャワー浴びようと思ったら扉が外れかけてて危くてさ、直すからちょっと押さえてて欲しいの」
「え？　はい。いいですけど……」

危ないのなら用務員等に報告した方がいいのでは。と疑問に思いながらも空は快く引き受ける。
「それでここの奥のシャワーなんだけど……」
楓は空を連れてシャワールームに入り外れかけているらしい扉を開けて個室の中に入る。
「普通に開きましたけど、ここなんですか？」
「まあなんともないんだけどね」
「……え？」
空の左腕を楓は素早く掴み後ろにひねり上げ手錠をはめ、そこから手すりを通して右腕にもはめる。
身長さもあるが咄嗟に腕を強く掴まれ、ろくな抵抗も出来ずに空は拘束されてしまった。
「嘘ついてごめんねぇ。でもキミ可愛いから気になってね」
身の危険を感じた空は逃げようともがくがガチャガチャと手錠の音がなるだけで外れる気配はない。
「ダメだよ暴れちゃ、綺麗なお手手に傷がついちゃうから。それに頑丈な奴だから外すなんで無理無理」
楓は不気味な笑みを浮かべ空の上着に手を忍びこませる。
「ひっ！　や、めてください……」
「可愛い反応だねぇ。誘ってるのかな？」

「そんなんじゃっ！　やぁ……」

すっと楓の指が空の腹をくすぐるようにしてなで回す。

「お姉さんの方も中々だけど、キミの方が可愛いかな。男の子だけど味見したくなっちゃった」

「あ、味見って……。あぁっ」

「こういうこと。へぇ、やっぱりブラつけてたんだ。ってことは下も……」

「だ、だめ！　そこは……ッ！」

腹をいじっていた手とは反対の手で空の太股に手を添え、ゆっくりとスカートをまくりあげる。

「ちゃんと下も穿いてるのね。下着が盛り上がってるけど？」

楓に腹と太股を愛撫され、不覚にも空は感じて勃起し

ていたようでショーツの中で固くなっていた。
そのまま楓はショーツの中に手を入れて空の硬くなっているものを解放させる。
「本当に……や、めてください……。はぅ……」
かすれた声で空は嘆願するが、楓には意味もなく、むしろその反応を楽しんでいるようだった。
「びくびく反応してるね。可愛い顔してるのにこんなにいやらしいもの生やして」
楓は空のものを指先で確かめるように軽く握ったり上下に動かして空を感じさせる。
そして手のひら全体で包み指はショーツの玉で膨らんでいる部分を転がす。
「んうぅ……。やぁ……」
「ふふ、女の子みたいな声。玉玉弄られるの気持ちいいんだ？」
大事なものを扱うようにそっと玉を触り、空の感じている声をじっくり味わう。
「私ねぇ、空くん見たいな可愛い子が感じている姿見るの大好きなの。……こうやって」
楓はそう言って今度はいきりたったペニスに指を絡める。
「シコシコされると気持ちいいんでしょ？　先っぽ濡らしちゃっていやらしいねぇ？」
「はぁ、んああっ……！」

ゆっくり楓は握ったものを上下に扱くと空はその刺激に声を漏らしてしまう。

感じたくないのに我慢しても乱れた息と供に小さい喘ぎ声が勝手に出る。

「1人でする時もこうやって弄ってるんでしょ？　自分でするのと私にシコシコされるのどっちが気持ちいい？」

「んっ……はぁ。そんなの、知らな……あうぅぅっ！」

「まあ、私の指で感じて可愛い顔見せてくれるのならどっちでもいいけど。んふふ……」

楓の舌なめずりの音が空の耳に入り、反射的に震える足で楓から離れようとするが、

上半身に回された腕がそうはさせてくれない。

「うぅぁっ……んぅぅ、あっ、あぁ……。や、めて……もう……」

「ふーん、じゃあやめてあげる」
急にシゴくのを止めペニスから手を話した楓に空は唖然とする。
「どうしたの？　驚いた顔しちゃって」
確かに止めてとは言ったものの、こうあっさり止めてもらえるとは思ってなかった空だったが、
楓が満足したのだと思ってしまう。
「はぁっはぁ……。は、早く、手錠もっ！　……んっ、あぁっ！」
「あれぇ、おかしいな。続きをしてくださいってお願いしてくるのかと思ってたけど」
再び楓は空のものに指を絡ませ軽く弄りだす。
「我慢強いね。まあ今日のところはこのままイかせてあげるね」
「んんっ！　くぅぅ……、やぁっ、やだ……離してっ」
空は必死になって楓から逃げようとするが、がっしりと楓が空の身体を押さえ少しも離れられない。
「今度は空くんがイクまでシゴき続けてあげるからね？　ほらさっきみたに可愛い声出してごらん？」
「んあぁっ！　ぐっ、うぅぅ……あぁっ！　あぁぁ……」
目を瞑り唇を噛んでなんとか耐えようとするが、与えられる快楽に空は足が震え上げる声もとても我慢しきれ

ない。

「ん？　そんなに震えちゃってそろそろイキそうなの？　気持ち良さそうな声も出しちゃって」

空の鈴口から出てる先走り汁が潤滑剤になりいやらしい水の音を立て楓の愛撫の助けになる。

「や、いやぁっ……、うううぅ、も、もうだ、め……」

空はぎゅっと拘束された両手を握り体重を支えられなくなり楓に寄りかかる。

「うぅ、ぐぅぅ……あああぁああぁぁっ……！」

ビクっと身体が跳ね空の下半身から精液がほとばしる。

射精が止まるまで楓は空のものをシゴきその動きに合わせるように精液が出る。

出し終えた空は楓の胸の中で息を乱し身体に力が戻るのを待っている。
「ふふ、イっちゃったねえ？　精液向こうの壁まで飛んじゃったね」
「はぁはぁっ……うぅぅ……」
目的を達した楓は空の拘束と解くと、射精後の脱力感にその場にへたり込んでしまう。
そんな空の姿を楓は携帯電話のカメラに収める。
「ここに君が下半身丸出しで回りに精液が飛んでいる写真があります。どうしようかなぁ」
「うぅ……。脅してどうするつもりですか？」
「脅すなんて人聞きの悪い、また私とイイことして欲しいなぁって思ってるだけ。ふふふ……」

それから服を整え楓と供に部員がいるプールサイドに戻る。
「あ、戻ってきた。遅かったねって……楓先輩来れたんですね」
「まあね。ちょっと扉の調子が悪くて空くんに直すの手伝ってもらってたんだ」
「そうだったんですか。……ん？　空くん顔色悪いけど大丈夫？」
美波が元気なさそうな顔で空のことを心配し空に駆け寄る。

「楓、まさか空くんに酷いことしたとかじゃないよね？」

彩音が目を鋭くさせて楓に迫っていく。

「あっ……。だ、大丈夫です。気が抜けてちょっと疲れがきちゃっただけですから」

「本当に？　そろそろ練習再開するけど落ち着くまで日陰で休んでて大丈夫だからね？」

「はい、ありがとうございます……」

美波達を騙してるみたいで空は後ろめたさを感じたが、先ほどのことを。

空は少し休み気持ちを落ち着けなんとか手伝いに戻って行った。

2話

翌日、空は重い足取りでまた水泳部に来ていた。
また楓に無理やり射精させられるんではないかと不安だったが、
それでも姉の代わりに頑張らなくてはいけないと思い行くことを決心する。
今日は朝から楓が来ており、空を見て唇を吊りあげる。対して空はなるべく顔を合わせないようにしていた。
そして特に問題なく部活の時間が過ぎていき休憩時間を経て部活動が終わる。
なんとか今日は楓に絡まれることなく帰れそうで安心していたところを彩音に声をかけられる。
「空くんお疲れ様。今日も手伝ってくれてありがとう」
「いえ……。役に立てたのなら良かったです」
「もう本当に助かってるよ。空くんがいなかったら大変だったよ」
彩音と美波にお礼を言われた空は、助けになっているという実感がわき少し嬉しくなる。
「それでよかったら今からプールに入ってみない？」
「え？　今からですか……」

急な彩音の提案に空は戸惑う。
「この暑い中でプールを眺めているだけってのも酷い話だと思ってね」
「私もたまに入ってるしいいんじゃない？」
美波も彩音の提案に賛同し空に勧める。
「気持ちは嬉しいのですが、まだ片づけが残ってますし、それに水着が……」
「片づけはもう殆ど終わってるし後は1人でも問題ないよ、あと水着は予備のがあるから大丈夫」
彩音と美波の説得にそこまで言うのならと渋々といった感じで了解の返事をした空だったが、
自分のことを気遣って言ってくれた彩音達の言葉にとても嬉しく感じる。
「えーと空くんのサイズだとこれかなぁ。他はもう解散したから着替えてきて大丈夫だと思うよ」
当たり前だが男子用の水着などは無く空に渡されたのは女子用の水着だった。
空は一瞬受け取るのをためらったが、ここまで来て後に引くのは無理だと思い受け取り更衣室に行く。
更衣室に誰もいないのを念入りに確認して着ているものを脱ぎ水着に足を通す。
ピッチリと胸まで覆う水着が落ち着かず、着替え終わった空は恥ずかしそうに彩音達の所に戻る。
「ほ、本当にこの格好で入るんですか……？」

「似合ってるし問題無いと思うよ？　じゃあ入る前に軽くストレッチね」
「時間はまだ余裕があるからゆっくり楽しんで大丈夫だからね」
美波が見守る中、空は彩音に手を引かれプールサイドで柔軟を始める。
「そういえば空くんって泳ぎは得意？」
「あまり得意ではないです……」
「それじゃあ、私が空くんの泳ぎ見てあげるね」
空のストレッチを手伝いながら彩音はふと広げている足に手を伸ばす。
「こうして見ると空くんの足細いね。色白だし羨ましいなぁ」
「そんなことないと、あっ！　ちょっ、そこはくすぐったいです」
彩音はすりすりと関心しながらあちこち触り、くすぐったさから思わず笑う。
我慢できなくなった空は彩音の手から逃げると困った顔を彩音に見せる。
「ふふ、ごめんね。でもちょっとは元気でたかな」
彩音は不意に空を優しく抱きしめる。
「え？　あ……」

「なんか朝から落ち込んでたみたいだし嫌になったのかなって」
「嫌なんてそんなこと……」
「なにかあったらすぐ相談していいんだよ？」
優しく気遣ってくれる彩音なら昨日のことを相談してなんとかしてくれると思い、口を開けるが中々言いだせない。
そんな空の様子を不思議そうに彩音が首を傾げる。
「ううん。彩音さんのおかげで元気がでました」
余計な心配をさせたくない空は笑顔を作ってそう答えた。
……
「じゃあ私は美波と最後の点検してくるから先にシャワー浴びて着替えてて」
空も手伝おうとするがすぐ終わるからと半ば強引に止められやむ無く先にシャワーを浴びる。
「ふふふ、随分と可愛い格好してるじゃない」
「うっ……楓さ、ん……」

誰もいないはずの更衣室に戻った空に楓が待ち伏せており驚いて後ずさる。
逃げだそうとする空だったが楓にあっさりと捕まってしまう。
「逃げるなんてひどいじゃない。あの写真みんなに見せちゃってもいいの？」
昨日の写真を脅しに使うと言われ空は抵抗を止め逃げることを諦める。
「そう、それでいいの。大丈夫可愛いお手伝いさんをちょっと労ってあげるだけだから」
楓は空の水着姿をじっくりと観察するとその場に座らせ空の股間に手を伸ばす。
「おちんちんで水着膨らませちゃっていやらしいねぇ？　大きなったらどうなっちゃうかなぁ？」
「さ、さわらないでくださいっ」
空は楓の手を跳ねのけ足を閉じ手で下半身を守るが、楓の力には敵わず強引に開かせさせられる。
「恥ずかしがっちゃって……。今日も私と楽しみましょ」
「うぅ……、いやぁ……。あぁっ！」

楓の指が空のペニスをとらえるとゆっくりと上下に愛撫し始めた。

「ほら段々硬くなってきたよ？　ふふふ、くっきりと浮き出てる」

「んんぅっ、はぁっん……。や、見ないで……」

直接触られるのとはまた違った気持ちよさが水着越しの愛撫によって空に襲いかかる。

「昨日よりいい反応だね？　女の子の水着気に入ったのかなぁ？」

「ちがっ、んっ……、あっ」

「頑張ったマネージャーさんにはいっぱいお礼しないとね」

空はなんとか逃げだそうと試みるが快楽によって力が入らず、楓の撫で回している手に弱々しく抵抗するのが精一杯だった。

腰が勝手に跳ね無理やり気持ちよくさせられもうどうしようもないと思っていた時、更衣室に人影が現れた。
「あ、あやねさ、ん。たすけ……」
入ってきたのが彩音だと解ると空は必至で助けを求める……が。
「ちょっと！　空くんは私が貰っていいって言ったじゃん！」
「……え？」
彩音は速足で空のもとに駆け付け楓から奪い取るように手を伸ばす。
「いやぁ、悪い悪い。ちょっと可愛いかったからついね」
「何がついよ。昨日から空くんが元気なかったのやっぱり楓のせいだったんじゃん」
２人の会話についけいけず混乱している空の頭を彩音が優しく抱きしめる。
「ごめんね。様子が変だって気づいてたのに」
彩音は楓にもの言いたけな視線を飛ばす。
「ちょっとくらいいいじゃん。空くんを入れる計画立てたの私なんだし」
「それは……そうだけど」
「だったら、少しくらい混ぜてくれてもいいんじゃない？」

「混ざるどころか勝手に襲ったくせに」
「あ、あやねさん……」
２人の怪しげな会話の内容に不安そうな空は、恐らくこの場の味方であろう彩音に助けを求める。
「ごめんね。こっちの話だから。それより空くんのここどうにかしないと……」
「あの、もう大丈夫ですから。今日は……」
「男の子はこうなったら一回出さないとダメなんでしょ。大丈夫、私に手伝わさせて」
「え？　い、いえ！　そんなことないですから」
「遠慮しないで、私の責任でもあるんだから。そうだ、どうせなら……」
空が何か言おうとする前に一旦彩音は離れると自分の荷物からローションボトルを取り出し戻ってくる。
何の容器か解らず戸惑っている空の前でその中身を手に垂らし見せる。
「ローション見るの初めて？　こうやって塗るとぬるぬるしてよく滑るようになるの」
「ひゃっ……うぅ、これ……んっ、やっ」
「せっかくだからいっぱい気持ちよくした方がいいよね」

彩音は空の胸から脚にかけてローションを満遍なく垂らしていく。

反射的に空は避けようと身体を動かすが、肌が擦れ合いローションを伸ばす結果になってしまう。

「空くん脚敏感だったよね。いっぱいかけてあげる」

「あぁ、だめ、んぅ……。そこっ……」

彩音は自分の脚にもローションを垂らして空の脚に絡める。

「水着がいやらしい感じになっていいねぇ。私にもやらせてよぉ」

「まったく……。今度から勝手に空くんに触るの禁止だからね」

「あ、彩音さん！」

「ごめんね。楓とはちょっと古い付き合いだから。大丈夫も

う勝手なことさせないから」
反対側から楓が彩音と同じように受け取ったローションを垂らしていく。
そして彩音と楓の手足が両側から空の身体に絡み瞬く間に全身に塗りたくられる。
「もう体中ぬるぬる。こうやってこすり合わせると気持ちよくない？」
「あ、んっ……はぅ……」
同時にいろいろな場所を責められ思わず高い喘ぎ声を出してしまう。
「耳も脚も感じやすいのかな？　さっきから可愛い声が止まらないねぇ」
段々と全身の力が抜け、思考が鈍り、なすがままに身体を愛撫される。
声を我慢しようとしても、身体中から来る小さな快楽がそれを許さず、空の口から絶えず声が上げられている。
「んふふ、女の子みたいな声出しちゃって可愛い」
「女の子の格好して女の子のように責められるの気持ちいいの？」
いままで感じたことのない快楽に空の理性が少しずつ失われ、甘い刺激が身体全体を駆け巡る。
だが与えられるのは絶頂に程遠い焦らされるような快楽。
既に空のペニスは限界まで硬くなっており、先端からは多量の露が零れているがローションのおかげで解らなかっ

た。

「はぁ……っ、あぁっ、ひゃ……っ、んんぅっ！」

「いい感じになって来たね。そろそろ頃合いかな」

空は股間に伸びてきた彩音の手に期待するが、ローションをたっぷりまとった指はペニスを通り過ぎると、肛門を隠している水着をずらして穴に触れた。

「空くんにとっても気持ちよくなれる場所作ってあげる」

彩音が人差し指に力を入れると、少々抵抗があったものの滑りを増した指はゆっくりと空の穴に入っていく。

「ぐぅぅっ！　そこは……ちがっ！」

「何も違わないよ。男の子のお尻って女の子より感じるらしいしね？」

細い指でも経験の無い空にとってはとてつもない質量に感じ苦しそうな声を上げる。

「ほら力抜いて……、先端が入ったら息を吐いて、今度は私の指を押し返すようにね」
「ううぅ……、だめ、そこっ！　やぁ……」
彩音は入れた指を空の反応を見ながら感じるところを確かめ刺激する。
だが穴を指に占領された苦しさの中で、初めて刺激されたそこは気持ち悪い変な感覚としか空は感じられなかった。
「じきに良くなると思うからちょっと我慢してね」
なだめるように彩音は空の唇を唇でふさぎ、舌を挿入する。
突然のキスに驚いた空だったが、そのまま身を任し受け入れてしまう。
彩音が空の唇を奪ったまま楓に視線を送ると、楓は意図を理解したようで空の硬くなったペニスに触れる。
「んんぅっ！　あんぅ……っ！　うううっ」
「空くんのここ凄い硬くなってるねぇ？　お尻弄られて興奮したの？」
散々焦らされていた空は突然ペニスを弄られ驚き叫び声を出すが、唇をふさがれているためにくぐもった声しか上がらない。
ペニスの刺激に合わせるように、彩音の指を締め付けている空のアナルがヒクヒクと動く。

「ん……、ぁ、ふぁ。あ……、んぅ……」

次第に空のアナルが入れられている指に慣れてくると、嫌悪感が薄まった下半身からじんわりと未知の感覚が広がっていき、

また徐々に声が漏れていく。

息も荒くなり、その感覚が惚けた頭まで這いあがってきたとき、苦痛が完全に快楽だけが空に残る。

「その表情、とっても可愛いよ。お尻気持ちいいんでしょ」

「あぁぁ……、だぁ、め……。お尻が、へんな……」

「もうお尻で感じてるんだ。意外と淫乱な身体してるんだねぇ」

彩音は空が感じ始めたのを境に、中に入れている指を抜き差ししてアナルを犯し始める。

「うあぁっ！　やぁ、ちがっ……。へんなだけで」

抵抗がなくなった空のアナルは彩音の指を歓迎するようにヒクつく。

指が動くたびに感度もどんどん上がっていき、その快楽に喘ぎ声が自然と漏れてしまう。

もはや、空の尻は完全に性器に成り下がっていた。

「ふあぁぁ、んんぅ……。なにこれ……」

身体も口も、そしてアナルもドロドロに弄られ、限界になった空は涙目になりながら彩音に許しを請う。
「あぁ……、もう許して……」
「許す？　あぁ、そろそろイきたいのね。でも、もう少し空くんと楽しみたいんだけど」
「空くんももう限界みたいだしイかせてあげてもいいんじゃない？」
「そうね。……じゃあ、明日もちゃんと来るって約束してくるかな？」
空のアナルを弄りながら彩音は囁きかける。
「あああぁ、きます……。んぁっ！　ちゃんと、きますからっ！」
もうこれ以上弄られたらおかしくなってしまうという焦りから彩音に即答する。
「ふふ、約束したからね。そのまま楓はおちんちん擦ってあげて。私はお尻に集中するから」
「あああぁあっ！　いじりながらっ、なか。だめっ、へん、あぁぁ」
楓が絶頂に導くように水着の上から空のペニスを指で包んで扱くと、叫びのような喘ぎ声が響く。
激しいペニスへの愛撫に、相当焦らされていた空にとって強すぎる快楽となって襲いかかる。
「お尻もいっぱい弄っててあげるからいつでもイっていいよ」

「ああっ、もう、だ、めぇ……」

感度を限界まで高められていた空が耐えられるはずもなく、すぐにその時がやってくる。

「あっ！　あぁんっ、い、いっ、あああぁあっ！」

空が叫ぶのと同時に身体を仰け反らせ、水着の中に大量の精液をぶちまける。

既にいろいろな液体でびちょびちょになっていた水着からは白い精液が染み出てくる。

出し終えてもなお、空のペニスはビクビクと跳ね、やがて段々と治まっていく。

イき終え脱力した身体をぐったりとさせた空の瞳は虚ろになっていた。

……

行為がようやく終わり、脱力している空を彩音が肩を貸してシャワーの所まで運んで身体を洗い流す。

「ごめんね、せっかく来てくれたのにこんなことになっちゃって」

「いえ、彩音さんのせいじゃないです……。それに元はと言えば僕のせいでもあるし」

「ううん、ちょっと私も興奮してやりすぎたし、もし辛かったら明日は来なくても大丈夫だからね」

少し寂しそうに彩音がそう言い、まだふらつく空が抱えられながら戻ると、一足先に戻ってた楓が汚れた床を綺麗にしていた。

それから3人は着替えると美波と合流する。美波も一連の共犯なようで空を見るに大体察しがついた様子だった。

「2人に可愛がって貰ってたんだ。いいなぁ」

どうやら美波の話によると、ここの運動部の子や高身長やスタイルの良い子は憧れの的になるらしく、水泳部も例外ではなかった。

殆どは恋人ごっこみたいな感じだが、中には楓みたく行為に及ぶものも少なくないということを聞かされる。

当初、空の姉に目をつけていたが、予想外の怪我によって来れなくなっていたところ、楓が弟の空に目をつけたとい

うことだった。

「じゃあ空くん明日も待ってるからね」

そう言って自分の手を握ってきた彩音に、先ほどの行為といつもの優しい笑顔が混じり戸惑いを隠せなかった。